

1. シンポジウム

(6月22日 13:00~15:00 第1室)

【テーマ】 令和時代の英語の学び方～自律的学習者を育てるために～

コーディネータ：酒井 英樹（信州大学）
岡崎 浩幸（富山大学）
パネリスト：津久井貴之（群馬大学）
伏木 久始（信州大学）
正頭 英和（立命館小学校）

【趣旨】

富山大会は、これまで学習指導要領改訂の数年後に開催されてきた。今大会もその成果や課題を検討する場として最良の機会となる。令和3年の答申「令和の日本型教育」では、「令和の日本型学校教育」の在り方が「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と定義されている。このような学び方が注目されている現代において、本大会シンポジウムでは「令和時代の英語の学び方—自律的学習者を育てるために」のテーマのもと、この学び方が英語教育界においてどのように活用されているのか、AIや教師の役割を考慮しつつ、現状と課題について皆様と議論を深めたい。

「個別最適な学び」と令和時代の「生身の英語教師」の役割の再検討—指導事例を振り返って—

津久井 貴之（群馬大学）

「個別最適な学び」は、指導者側から捉えると「指導の個別化」と「学習の個性化」と言える（令和3年中央教育審議会答申）。ICT ツールを活用した高校及び大学での英語の指導実践を通して、「指導の個別化」には、生徒・学生 1人1人の英語学習実態や意識の把握が重要であることを再認識した。実態把握の成果は学習者ごとの支援の充実という個別化に偏る傾向がある。しかし、指導方法や教材の柔軟な変更、指導の軽重も同時に実現させたい。特に高等学校の英語指導では、指導方法や教材を変えず、個別支援だけを強化しようとする傾向が見受けられる。また、「学習の個性化」では、学習を最適化させる試行錯誤がどれだけ生徒に許されているだろうか。例えば、添削・翻訳ツールについても、教室という安全・安心な場だからこそ、使わせない指導ではなく、使い方を学ぶ機会を提供したい。個別最適な学びを探求する生徒が学び方を含めた共有を行うことで、「協働的な学び」の意義はさらに高まるだろう。そして、その「協働的な学び」の中で得た気づきを個別最適な学びの調整に生かしていきたい。

デジタル教材の普及やAIを含むICTツールの活用により、令和時代の英語教師は「なぜ私（生身の英語教師）がこの教室で生徒たちと英語を学ぶ必要があるのか」を問われている。英語教師の役割の変化は、facilitator, coordinator, motivator, coach などさまざまな言葉で形容されている。教員養成を担う立場になり、mentor（英語学習の専門知識や経験を共有し、個人の成長を促し、将来のキャリアにも影響を与えられる人）と mediator（教科書と学習者、ツールと学習者、言語間・文化間のギャップ仲介する人）としての役割を担う英語教師を育てたいと考えている。現在はescort runner 的役割が注目されているように思われるが、先輩英語学習者としての姿を示し、さらに、生徒の自律性を高めていくために、mediator から facilitator や coordinator へと教師自身も自律的に役割を調整できるようになれば理想的である。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的充実を志向する授業

伏木 久始（信州大学）

欧米社会では、外国語に触れる機会は学校教育だけではなく、テレビ番組等の音声・字幕を日常的に視聴する環境にあり、特にEU圏内では国境を越える人々の移動が柔軟であるため、母語以外の外国語を学ぶニーズがそもそも高い。教育制度の違いもあるが、入試対策に注力しがちな日本の中等教育とは前提条件が異なり、外国語での会話ができるようになること、外国語のテキスト（文献を含めて）を読み書きできるようになること自体がそれぞれの学習者のレベルに応じて目標設定されているのが欧米各国の語学教育のポピュラーな実情であると理解している。

一方、東アジア圏では語学の筆記試験の得点も入試の合否を左右する制度が維持されていることもあり、学校の授業に試験対策型の指導が導入されたり、放課後の学習塾が普及したりしている。それらは学習者が自分のニーズに従って選択する学習よりも、一律に指示された学習活動に従って学ぶことが主流であり、日常生活や将来のキャリア形成と結びつけて外国語を主体的に学ぼうとする動機を弱めてしまう。特に、日本の場合は1億人以上の人々が住む島国で、国際化が進む現代にあっても、外国語を話せなくても日常生活に困らない国民が多いという実情が外国語教育を困難にしている。

それゆえ、外国語を指導する教師たちに求められる授業力には、語学のスキルのみならず、外国語を学ぶ意義の理解と、個々の学習者のレベルやニーズの多様性に配慮できる柔軟な学習指導観に裏付けられた専門性が求められよう。「令和の日本型学校教育」と表現した中教審答申（2021.1.26）には、学校では「みんなで同じことを同じように」を過度に要求する面が見られ、これまでの学校教育では自立した学習者を十分育てられていなかったと課題が指摘されている。外国語の授業も例外ではないだろう。

本発表では、こうした課題を克服するアプローチとしての個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実という観点から、外国語教育とりわけ英語の授業方法について具体的に提案したい。

令和時代における小中学校教育の変革：個別最適化と協働的学習の融合に向けて

正頭 英和（立命館小学校）

現代日本の教育環境は、急速なテクノロジーの進化と共に変化を遂げている。特にAI（人工知能）の導入は、教育の質を変革する大きな潜在力を持っている。しかし、その活用には未だ多くの課題が残されており、これからの教育が目指すべき方向性について議論する必要がある。本シンポジウムでは、令和時代の教育の理想と挑戦に焦点を当て、自律的な学習者を育成するための教師の役割について考察するものである。

まず、教育においては、AIとアナログの手法が対立するのではなく、どのようにこれらを融合させるかが重要である。AIを活用した個別最適な学びは、生徒一人一人の能力と興味に応じた教育を可能にする。この個別化された学習アプローチは、生徒の理解度に合わせてカリキュラムを調整することで、一人一人の最大限の学習効果を引き出すことができる。

一方で、協働的な学習は社会性や協調性を育むために不可欠である。PBL（プロジェクトベースドラーニング）は、生徒が現実世界の問題を解決するプロセスを通じて、知識を深めるだけでなく、批判的思考、創造性、コミュニケーション能力を養う効果的な方法である。このように、個別学習と協働学習の一体化は、生徒がそれぞれの強みを活かしながらも、他者と協力して学ぶ重要性を理解するために不可欠である。

また、AIの導入によって能力の差が目立たなくなる中、教育の動機付けが新たな課題として浮上している。学習の「損得」ではなく、「学ぶ楽しさ」を重視する文化の醸成が求められている。モチベーションドリブな学びを促進するためには、生徒が自らの学習目標を設定し、達成するプロセスにおいて自己効力感を高めることが重要である。教

師の役割は、指導者からガイドへと変化し、生徒が自主的に学び続けるための支援を提供することが求められている。

令和時代の日本の教育が目指すべきは、技術と人間性が融合した新しい学びのスタイルである。教師はこの変革の中で重要な役割を担い、持続可能な社会の礎を築くための自律的な学習者を育成することが求められている。今後の教育は、技術の進展を活かしつつも、人間らしい学びができる環境をどう整えるかが鍵となるであろう。

学校教材・ワークブック

富山暁図書販売株式会社

富山市神通町2丁目1番18号
TEL (076) 441-4947 FAX (076) 441-6228

富山にいながら、まるで留学しているような学校生活をお約束します。

ENGLISH.
EVERY DAY.
毎日、英語。

◀ どちらを選ぶ？ 2つの学科 ▶
高校卒業以上 → 実務英語科 (2年制)
さらに上級を目指す → 専攻科 (1年制)

◀ 全国で唯一！公立の外国語専門学校 ▶
TOYAMA COLLEGE OF FOREIGN LANGUAGES
富山市立 **富山外国語専門学校**
〒930-0084 富山県富山市大手町6-14 ☎ 076-491-5911 ✉ tcfl@tcfl.ac.jp

website facebook instagram